

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センター だより

川俣町 保健福祉課 健康増進係
これまでの取組と今、感じていること



川俣町保健福祉課の受付 明るい雰囲気です

平成 29 年 3 月に川俣町山木屋地区の居住制限区域及び避難指示解除準備区域が解除となり、平成 30 年 4 月には山木屋地区に小中一貫校が開校しました。これまでの地域活動と、今、保健師として感じていることを、川俣町保健福祉課課長補佐 佐藤ミイ子様と、総括主任保健師の橋本貴子様にお話を伺いました。

——平成 29 年 3 月に山木屋地区の計画的避難区域の避難指示が解除になりました。まずはこれまでの活動についてお話をお聞かせください

山木屋地区が計画的避難区域となって、住民の方々が色々な施設等に避難しましたので、体操教室などを企画し、住民の避難先に赴いて血圧測定や、健康相談等を実施しました。仮設住宅や借り上げ住宅に移ってからと同様です。帰還後、山木屋地区のある一地区でサロンを開設したので、そちらでも年に3回ほど保健師が外向いて血圧測定や健康体操などをやっています。地区へ戸別訪問も行っています。

——山木屋地区だけといっても戸別訪問で一軒一軒歩いて回るのは大変ですね。

保健師 4 名で山木屋に戻られた方の全戸訪問を目標にしていますが、お話を伺うのに 1 人に最低 1 時間くらいかかります。

——戻られているのは高齢世帯が多いですか。

そうですね。20 代 30 代で戻っている方は少ないです。震災前は 9 人とか 10 人の大家族世帯だったのが、子供夫婦と孫夫婦で別世帯になり、山木屋地区には高齢夫婦だけで戻ってきている方もいます。こちらに来て欲しいという思いはあるけど、避難先に定住してしまったから…と揺れ動く思いも聞かせていただくことがあります。離れて暮らすお孫さんも、山木屋に遊びには来るんだ、という話も聞いています。

——若い世代が戻ってくる障壁のひとつとなっている放射線への不安に対し、放射線教育が必要ではという話も聞くのですが、その辺りについてはいかがですか。

以前、近所の方からタケノコご飯をいただいたのですが「九州産のタケノコだから」と気を遣ってもらってびっくりしたことがあります。

親の私は心配していないのですが、もしかしたら気にしているのかと自分の子供に尋ねてみたら、逆に何が心配なの、と言われました。

子供は学校で教えてもらっていますが、親世代は放射線の知識に触れる機会が少ないのかも、と思います。ただ私たちも親世代との接触が少ないのでなんととも言えません。

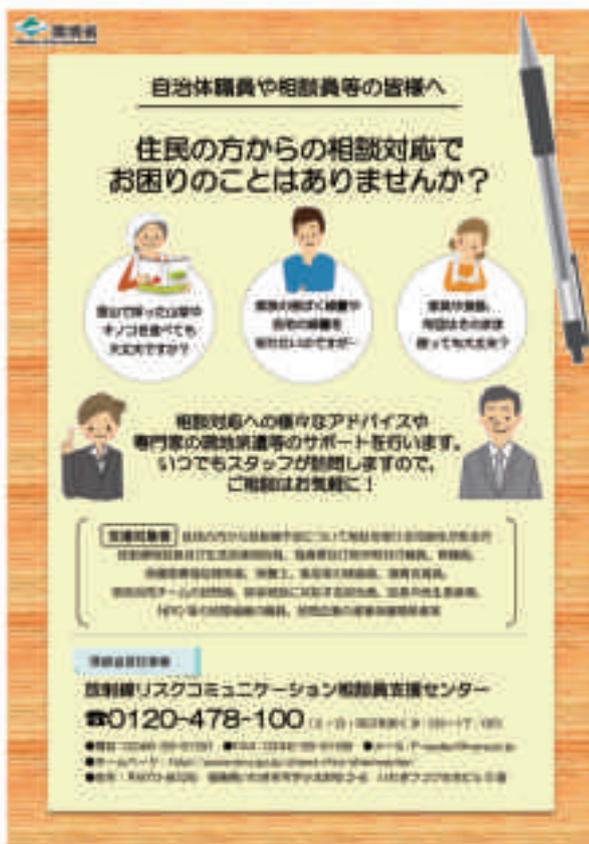
——課題があるかどうかは様々な部署との連携をどのように取り、掘り起こすか、ということかもしれませんね。社会福祉協議会等との連携はどうか。

それはもちろん。むしろ、もっと連携を取らなく

てはいけないと思っています。仮設住宅訪問の時から、もっと訪問に行きたいと思いつつ実際は行ききれず、私たちよりも頻回に訪問している生活支援相談員に心配なケースを上げてもらい、保健師がアプローチするという形を取りました。今でもそうしています。ケースによっては福祉や介護の担当、地域包括支援センターと連絡調整をする窓口にもなっています。高齢の方が多くいますから。

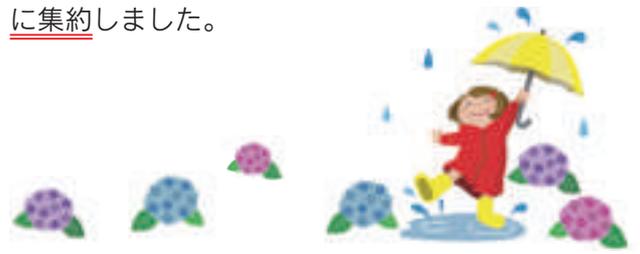
—子供を学校に入れている親の世代にどうアプローチしていくかが難しいという話、保健師が窓口になり専門につなぐことが大事という話。大変興味深かったです。ありがとうございました。

放射線リスクコミュニケーション 相談員支援センターの体制変更 ～支援対象地域と対象者が広がります～



昨年度まで放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターでは、国からの避難指示があった福島県内12市町村を中心に様々な事業で支援させていただいておりましたが、事業ごとに窓口が違い煩雑であるとのこと指摘もあり、本年度から窓口を一つ

に集約しました。



平成30年3月31日付で檜葉町では応急仮設住宅の供与が終了となり、富岡町、大熊町、双葉町、南相馬市・浪江町・飯館村・葛尾村の一部の地域の応急仮設住宅の供与も平成30年度末までに終了となる予定で、避難を継続している住民の方々を取り巻く状況が大きく変わります。そのため住民の方の放射線に係る健康不安等の支援について、福島県内12市町村が中心だった支援地域を拡大し福島県全域が対象となりました。

支援対象者についても、これまでは放射線相談員や生活支援相談員等、放射線の相談を受けることが少ない専門職の方を主な対象としておりましたが、福島県及び自治体等の除染担当者に加え、行政区長や民生委員といった、住民から多様な相談を受ける方も含め幅広く対応させていただきます。窓口が一本化することで、同一の住民の方等から受けていた複数の相談ごとを別々の部署で対応するといったこともなくなり、皆様の希望に添って、よりご負担を少なく、きめ細かい支援が可能となります。

平成30年度4月から川俣町山木屋地区、浪江町、富岡町、葛尾村、飯館村5町村で小中学校が開校し、昨年3月には双葉町がいわき市東田町からいわき市勿来町酒井団地に町外拠点を整備、また大熊町は4月23日に富岡町のふたば医療センターが開業したことを受け、居住制限・避難指示解除準備区域の準備宿泊を当初の予定より早め4月24日から開始しており、本年度に入り新しい動きが次々出ています。

拠点やインフラの整備をきっかけに避難指示があった地域の方向性が固まり、それに伴い住民の方からの相談件数の増加や相談内容の変化が考えられます。そのような際は放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターが皆さまのお手伝いを致します。どんな小さなことでも構いませんので、なにかございましたら是非ご相談ください。

富岡町車座意見交換会

相談員支援センターとは

県庁新築によって業務拠点が移された「2 市町村を中心とする相談員支援センター」において、自治体職員の方々や、市民からの相談相手としての関与が生活の上での役割に、対応する自治体職員に対して、相談員へのアドバイスや専門的な相談支援、研修などの研修等の支援を専門で行います。

●以下のようなサポートがあります

- 相談対応支援
- 専門家の派遣
- 相談員等の実地支援
- 研修資料の作成支援
- 研修会等の開催
- 意見交換会の開催

●サポートまでの流れ

①相談 → ②打合せ → ③サポート



参加者にわかりやすく説明する折田先生（写真左）

5月9日、富岡町にお住まいの方を対象に車座意見交換会が行われました。講師に長崎大学の折田真紀子先生をお迎えし、今年の2月から富岡町役場1Fに非破壊式放射能測定装置が設置されたことや利用方法の説明をし、富岡町内で採取された山菜の4月の測定結果の表を実際に見ながら、記載されている数値の読み取り方、また、食品の基準値である100Bq/kgがどのような経緯で設定されたのか、食品の基準値は子供も含めた全ての人に適用されていることなど、クイズ形式で問いかけながらすすめていきました。

また、放射性セシウムが含まれる可能性のある食品を食べたとしてもWBC検査で体内にある放射性物質の量を測ることができること、また、WBC検査に依らず計算でも実効線量を出せること、日本の自然放射線による年間被ばく量は平均2.1mSvであること、世界平均では2.4mSvあることなどを学びました。年間追加被ばく線量は食品のみからでも約1mSvと年間平均被ばく量以下であることを学び、その後、町の非破壊式放射能測定装置で測った富岡町内で採れたタケノコ（70Bq/kg）を天ぷらにして皆でいただきました。

参加者からは「町内の方と町の情報交換ができて良かった」「子育て世代や子供向けにも、このような場を開催すれば、放射線に関する理解も深まると思う」「富岡町で採れたタケノコを食べられてよかった」といった声が聞かれ、町民同士の親睦も深められた様子で、会は好評のうちに終了しました。

相談員支援センターで行われている自治体研修・車座意見交換会・住民セミナーの例

自治体研修：南相馬市相談員研修

4月3日から5月2日まで約1ヶ月にわたる南相馬市相談員研修が行われました。今年度は4名の相談員が新しく入ることとなり、放射線の基礎やコミュニケーションについてなど、放射線の基礎と最新の知見について専門家の先生方から講義を受けました。ほぼ丸一日かけて行われる講義は座学だけでなく実践もあり、自分の目や手でも確かめながら学びました。最初はついていくことも大変だったかも知れませんが、この研修で培った知識や経験は住民対応の大きな力となるはずです。



「人と接するときに必要なことって？」コミュニケーションについて学びます

住民セミナー 川内中学校「放射線と健康」



坪倉先生と一緒に楽しく放射線について学びます

5月9日、相馬中央病院副院長の坪倉正治先生をお呼びして川内中学校の全生徒を対象に「放射線と健康」と題した放射線の授業を行いました。

小学生の頃に坪倉先生から授業を受けている生徒もあり、懐かしい顔ぶれの成長に先生の感慨もひとしおのようでした。改めて放射線の基礎についての授業が始まると、時おり笑い声も上がる中、生徒たちは楽しみながら学んでいました。

今回の授業を受けた生徒たちからは、「放射線は放射性物質から出ており、食べ物や土の中にもあってそこから出ていることを初めて知った」「SvやBqという単位について知ることができて良かった」といった感想があり、また、参加した23名中21名が今後も放射線の授業をまた受けたいと答えました。

理由は「日常を過ごすなかで参考になる」「正しい知識を知って知らない方に教えられるようにするため」「自分たちが知っておかなくてはならない」等、これからの生活に今日学んだ知識を生かしたいという声が多く集まったのが印象的でした。

浪江町（本宮市榊形第二集会所） 車座意見交換会「笑顔つむぐサロン」

6月11日、本宮市にある浪江町榊形第二市営住宅の集会所で、浪江町健康保険課放射線対策係の大谷みち子保健師にファシリテーター、同 西垣卓馬放射線相談員に講師をお願いし、車座意見交換会を

行いました。榊形第二市営住宅自治会では今回初めての試みということで、最初は緊張の面持ちだった参加者の方々。ファシリテーターの大谷さんからは「震災前からあった身の回りの放射線について、私たちの身の回りにはがんになる原因や因子がたくさんあること、浪江町役場で貸し出している線量計3種類についてそれぞれ放射線の何を測っているのか」の説明がありました。また、震災後、福島県民の健康状態が悪化傾向にあること、健康寿命を延ばすために取り入れて欲しい生活上のポイントなど、大谷さんの講話はわかりやすく、参加者の方々も徐々に緊張が解けて行った様子でした。



「笑顔つむぐサロン」の名のとおり、笑い声の響く車座集会になりました

改めて放射線について話をする機会は今まであまりなかった、という参加者の皆さん。質問の時間には、普段感じている放射線への疑問が次々あがり、講師の西垣放射線相談員が、質問にひとつひとつ説明していました。

予定時間をオーバーしても話題が尽きず、次もまた集まりたい、と参加者の方々が笑顔で帰っていかれたのが印象的でした。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.15

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町2-6
いわきフコク生命ビル5F

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

